和光中学校道徳通信　　*生徒会スローガン「自学豊心 ～前向き・励まし・思いやり～」*

和 ～心をつなぐ～

令和４年１２月１９日
第 ６ 号

ウズベキスタンに咲いた花

12 月は、戦後日本兵たちが日本人としての誇りを胸に生きた姿に学びました。

1945 年、終戦の年に、現在の中国の東北部「満州」にいた 60 万人もの日本人が現在のロシア(当時のソ連)の兵隊に捕まりシベリアへ連れて行かれ、マイナス 30 度の酷寒の地で、11 年もの間、強制労働をさせられました。ソビエト兵から「ダモイ、ダモイ（ロシア語で“家に帰る”という意味)」の言葉で嘘をつかれ、船や列車に乗せられて日本兵たちはシベリアへと運ばれたのです。その後シベリア強制収容所から当時ソ連の支配下にあった「ウズベキスタン」へ移されました。

〔※ 裏面：放送内容〕

☆ １年生 ☆

○ 日本人は他の国の人々と協力して働くことができる素晴らしい人間なのだと分かりました。日本人としての誇りを胸に、何事にも全力で取り組めるような人になりたいと思いました。

○ 嘘をつかれて、全く知らないところで働かされたのに優しい心をもてるのがすごいと思いました。ウズベキスタンの人々への優しさが、後で返ってきたことに感動しました。

☆ ２年生 ☆

○ 人は一生懸命に何かに取り組むことで、周りの人や他国の人に認められ、その人たちに守られることが分かりました。ウズベキスタンの人々が日本人墓地を守ってくれたことが一番心に残りました。

○ マイナス 30 度の寒さに苦しめられていたのに、劇場を作るとなったら仲間と協力して世界一の劇場を作ろうと言ったところがすごいと思った。

○ 永田班の「世界一の劇場を作ろう」という熱い思いが、聞いているこっちまで深く伝わってきた。彼らは言うまでもなく日本人の誇りです。

○ ウズベキスタンの人々のために力をつくした人たちを、私たちは忘れてはいけないと思いました。

☆ ３年生 ☆

○ 支配されていようが、人の心までは支配し尽くせないのかと思った。上からの圧力にも負けずに日本人のことを思ってくれていたウズベキスタンの人々をありがたく感じた。

○ 何があっても、そのとき、そのときを全力で生きることができる日本兵の力が、他の国の人にも伝わっていてすごかった。

○ 「世界一の劇場を作る」という高い目標をもって仕事に取り組んだ人たちの姿から、希望をもって生きる人々が力を合わせることで生まれるパワーの大きさを感じました。

○ 堂々と立つナヴォイ劇場は寒い異国の地で一生懸命働く日本兵の姿を映し出しているようでした。

★保護者の皆様へ

お子様と意見の交流をして、ぜひ感想などをお気軽にお寄せください。

切り取り線

保護者通信欄（お子様を通じて担任へお渡しください。）

ナヴォイ劇場

1966年4月26日、ウズベキスタンの首都で大地震が起き、7,800もの建物崩れ落ちました。そんな中で、たった一つ以前と変わらず堂々とした姿で立っている建物がありました。それは、地震の8か月前にウズベキスタンに連れて来られた捕虜が建てたナヴォイ劇場でした。

建設当時、飢えとマイナス30度の寒さの中で、毎日のように仲間が死んでいきました。苦しい日々の中で、日本人と同様に「敵国の兵士」として捕らえられた他の国の捕虜は、「食べ物をくれ！もっとましな生活をさせてくれ！」と要求し、働こうとしないこともありました。そんな中で、日本人は真面目に黙々と作業を続けました。戦闘機の整備部隊の隊長だった「永田行夫」は200人余りの部下と一緒にナヴォイ劇場の建設に携わりました。「永田班」の思いは一つ、「世界一の劇場を作ろう」でした。日本人としての誇りを胸に、持てる技(わざ)の全てを注いだこの劇場は、彼らの「魂の結晶」でした。

ある日の出来事。一人の男の子が、痩せ衰えながらも一生懸命働く日本人捕虜のところに近づいてきて食べ物をくれました。それから数日後、なんと、その日本人は手作りのおもちゃを少年に渡したのです。このような行動が地元の人々の間で知られるようになるのに、それほど時間はかかりませんでした。ちなみにその少年は、後の「ウズベキスタン中央銀行副総裁」でした。

劇場完成が間近に迫ったある日のこと、永田の部下である「永尾 清」が、高い所での作業中に落下し、命を落としてしまいます。墓に埋葬しようとした永尾の遺体は、あろうことか、事実を隠そうとしたソ連兵に撤去されてしまいました。しかし、この悲しい出来事の翌朝、永尾の死を悼(いた)み、花を手向(たむ)けるウズベキスタンの人々の姿がありました。

永尾の死から2か月後、2年の時を経てナヴォイ劇場は完成します。劇場には、巧みで美しい細工や彫刻を称(たた)える一枚のプレートが、今でも掲げられています。そこには、「1945年から46年にかけて強制移住させられた数百人の日本人がこの劇場の建設に参加し、その完成に貢献した」と刻まれています。当時のウズベキスタン大統領自らが「捕虜」ではなく、「日本人」と書くように命じたと言われています。

1991年、ロシアの支配から独立し、「ウズベキスタン共和国」が誕生しました。当時、現地の日本大使館のトップであった中山恭子氏は、日本で集めた寄付金をもってウズベキスタン首相に会い、日本に帰ることができないまま死んでいった日本人の墓の整備をしたいと頼みました。この日本人墓地は、かつて、ソビエト政府の「こんな墓地は壊して更地にしろ。」との命令に反発して、ウズベキスタンの人々が守ってくれた墓地でした。中山氏が訪ねたとき、首相はすぐにこう答えたそうです。「この地に眠る日本人は私たちの恩人です」と。そこで、中山氏は、持参した寄付金でウズベキスタンの学校にパソコンや授業で使う教材を贈り、余ったお金で現地の中央公園と日本人墓地に桜の木を植えました。「桜公園」と名付けられたその地には、毎年春になると美しい桜が咲き乱れます。二度と祖国の土を踏むことが叶わなかった日本人の魂は、桜の花びらとなり遠く離れた故郷(ふるさと)へと戻っていくのでしょう。

☆ 保護者の方からの感想 ☆　　１１月「母の強さ」

- 守るべきものができた時、鳥も人も本物の強さや優しさが生まれるのかなと思いました。この話を通して子どもたちに自分は愛されているのだということを知ってほしいです。
- 親が子を思う気持ちは、鳥も人も同じなんですね。でも、もし私がこの母鳥と同じ立場だったらどうしたでしょうか・・・。とても考えさせられる内容でした。今回のお話は、是非！親が読むべきです。そして是非！我が子と話し合うべきです。
- 自分がたとえ犠牲になっても子どもの命が救われるのであれば、それは親にとって本望です。子どもは幸せをもたらしてくれる存在、大切な宝物です。個人的には自分の子ももちろん他の子どもたち、助けが必要な人、動物にも深い愛情を注ぐべきだと思います。
- 家族みんなで話をして、命の大切さ、家族の絆について考えることができました。
- 動物（鳥）も人間と同じ愛情や感情をもっていて、子どもを守る「本能」が自然と備わっていることに驚きました。どんなときも愛情をもって子どもに接したいと改心しました。

（紙面の都合上、感想の一部のみ掲載しています。ご了承ください。）